

テーマ展示「考古学が解く食と技」、「考古学で学ぶ動物とのかかわり」を振り返って —企画展示室の改修とこれまで2回実施したテーマ展示の概要について—

村田章人 杉崎茂樹

はじめに

埼玉県立博物館施設の再編により、「さきたま資料館」は平成18年度から「さきたま史跡の博物館」にリニューアルし、それまで行ってきた民俗部門の諸事業を取りやめ、史跡と考古学の専門館として再スタートした。

同資料館には国宝の金錯銘鉄剣をはじめとした「稲荷山古墳出土品」を中心に展示する考古展示室と、重要文化財の「北武藏の農具」を中心に展示を行う民俗展示室の二つの展示室があり、後者は比較的短期間の展示を効率的に実施する「企画展示室」に改修された。

この展示室では特別展の他に比較的長いスパンで実施される「テーマ展示」が平成20年度までに既に2回実施されている。

本稿では企画展示室のリニューアル、そして2度のテーマ展示の概要を振り返って記述しておくことにする。
(杉崎)

I 民俗展示室のリニューアルとテーマ展示

1 さきたま史跡の博物館の役割とテーマ展示

県立博物館再編整備計画では、各県立博物館施設の役割分担の明確化が大きなテーマとなった。そのなかで、「さきたま史跡の博物館」は、国指定史跡である埼玉古墳群を中心とした史跡、および埼玉県が保管・管理する多様かつ多量の考古資料を活用した活動を行うことが役割として位置づけられた。いわば「考古学の専門館」としての役割である。その中で、従来型の通史展示ではなく、適宜テーマを設定し、テーマごとの切り口から考古資料を活用した展示を年度ごとに更新するという、「テーマ展示」というあり方が構想された。

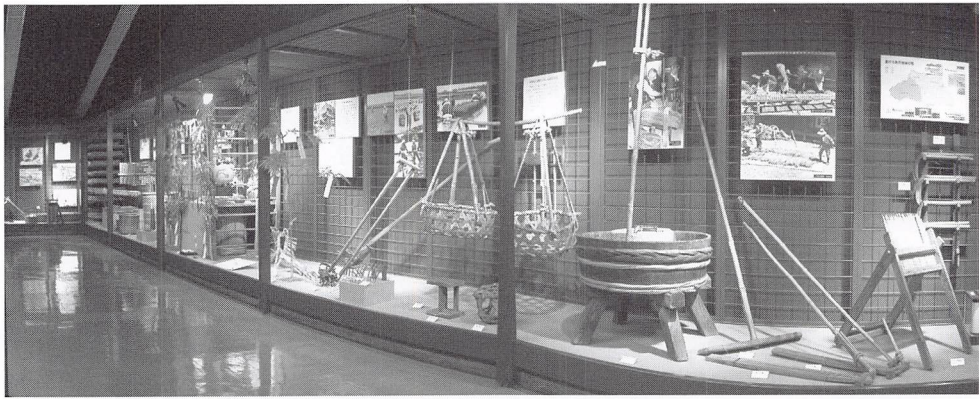
テーマ展示の構想には、2つのねらいがあった。1つは、再編整備計画によって、埼玉県の歴史全体と民俗全般をテーマとした活動を担うこととなった「県立歴史と民俗の博物館」との機能の差別化である。「県立歴史と民俗の博物館」では、埼玉県の通史を扱うため、先史時代から古代の主たる部分、及び中世の一部の展示資料は、考古資料が活用される。「さきたま史跡の博物館」では、これとの差別化を図るため、考古資料による通史展示ではなく、考古資料が持つ多様な側面、人の営みの中で生み出された物質資料としての、考古資料の魅力を活かすべき展示を行うことを目指した。

もう1つのねらいは、博物館施設のより高度な活用である。常設の展示では、どうしても展示の初期に獲得できた来館者数が、徐々に減少するという傾向がある。来館者数が博物館活動の唯一の指標ではないが、より多くの県民に親しんでいただくためには、いつ来館しても新しい発見があるという展示を追及するという考え方から、この「テーマ展示」というあり方が構想された。

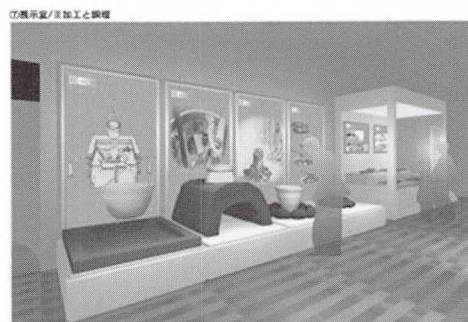
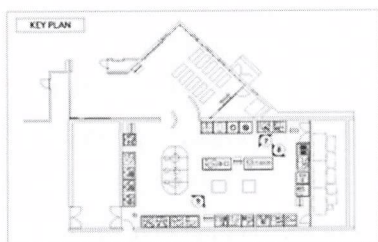
テーマ展示の展示期間は概ね1年間とすること、テーマ展示に用いる展示スペースは、旧民俗展示室とすること、また、その第1回の展示は、人類の歴史にとってもっとも大切な「食」をテーマとしたものとされた。

2 展示室改装の基本・実施設計の課題とその解決

初回テーマ展示の企画は、民俗展示室の改装と同時並行で進むこととなった。そのため、民俗展



改修前の民俗展示室（暗色を基調とした重厚な雰囲気があった。）



埼玉県立さきたま資料館 民俗展示室・ロビー コーナースケッチ

「考古学が解く食と技」のレイアウト検討中のスケッチ

示室の改装は、テーマ展示の継続的な実施を可能とするための改装という意味を持つことになった。

この展示室の改装とテーマ展示の企画・実施は筆者らが主担当となったが、平成17年度の埼玉県立さきたま資料館学芸担当職員と、埼玉県立歴史資料館学芸担当職員が協議を行い、検討を重ねながら実務を進めた。

展示室の改装にあたり、念頭に置かれたことは、(1)展示の更新可能性、(2)考古資料のより高度な活用に適した展示ということであった。

(1) 更新可能性

展示の更新可能性という点では、従来型の「特別展示室」とほぼ同様の設計理念を持つことになった。常設展示に見られる大型の模型やジオラマなどは作成せず、可動ケース、可動型の解説パネルを中心として設計した。展示ケースは通常の可動ケースの他、露出展示のステージにもなりうるモジュール型（組み合わせブロック型）のケースを作成した。

コーナー解説やグラフィック用の展示具は、職員が自作し、更新できるものとした。また、キャプション台は、解説のメディアをマグネットによって固定できる金属製のものとした。大形資料の展示等のためのステージも、組み合わせ式とし、展示資料に合わせて、形状と大きさを可変できるものとした。

(2) 考古資料の活用

展示資料の大半が考古資料となるということから、考古資料の魅力を引き出すことがもう一つの課題であった。展示室全体の色彩や床材の検討にあたって考慮されたことは、国宝展示室との差別化、学校による利用、考古資料の特質であった。これらの点から導き出されたことは「明るさ」、「開放感」、「資料の質感の重視」である。そのため色彩は、壁面、可動ケースのスチール部分ともにホワイトを基調としたものとした。 (村田)

II 平成18年度テーマ展『考古学が解く食と技』

1 開催趣旨

第1回テーマ展示を、食をテーマとした理由は、新たな博物館のスタートに当たり、人類の活動にとってもっとも基本的な分野を取上げるということ、そして、新たな館のコンセプトである「身近さ」や「わかりやすさ」に資するためである。

展示では、県内資料を中心に、考古資料の多様な魅力を引き出せることに留意しながら「食」をめぐる人々の活動の痕跡である考古資料を、実物資料、グラフィック資料、レプリカを基に展示した。

2 展示ストーリーの展開

展示構成は次のとおりである。「I 食器の移り変わり」、「II 食の確保」、「III 加工と調理」、「IV 食卓の華やぎ」の4つのテーマとし、さらに小テーマに分けて構成した。

I 食器の移り変わり

小テーマに「1 食と調理の道具」、「2 たくわえる」を設定した。「1 食と調理の道具」では、考古資料のなかで最も質・量ともに豊富な「うつわ」を中心とした調理具の変遷を追った。その際、より親しみやすくするため、現代の食器から過去にさかのぼるように展示を構成した。現代の食器のコーナーには、現代の一般的な食具に加え、学校給食の食器セットを展示した。各ケースには、各時代の代表的な食具を、群として展示し、時代の特徴がわかるよう工夫した。「2 たくわえる」では、アイキャッチの狙いもあり、展示室入り口付近のステージ上に、弥生時代・古代・中世の、直径1 m前後の大型土器の露出展示を行い、考古資料の持つ迫力を表現した。グラフィック

クでは、各時代の特徴を示すものとして実物資料を補完するものを配した。

主な展示資料

1 食と調理の道具

<現代>

- ・現代の食器類（参考：個人蔵）
- ・学校給食用食器（参考：行田市給食センター蔵）
- ・グラフィック
現代の食卓写真（個人提供）

<近世>

- ・川越市川越城跡出土陶磁器類（県教育委員会蔵）
- ・グラフィック
川越城跡出土陶磁器類集合写真（県教育委員会提供）

<中世>

- ・川島町堂地遺跡出土ロクロかわらけ・手づくねかわらけ（県教育委員会蔵）
- ・菖蒲町菖蒲城跡出土陶磁器類（同上）
- ・川越市在家遺跡出土緑釉皿・茶釜型土器（同上）
- ・熊谷市樋の上遺跡出土片口鉢（同上）
- ・騎西町小沼耕地遺跡出土杓子（同上）
- ・グラフィック
中世社会の道具解説図

<古代>

- ・上里町中堀遺跡出土灰釉陶器、土師器・須恵器（県教育委員会蔵）
- ・グラフィック
中堀遺跡（宴の様子）復元イラスト

<古墳時代>

- ・行田市築道下遺跡出土土師器、須恵器（県教育委員会蔵）
- ・グラフィック
築道下遺跡かまど写真（県教育委員会提供）

<弥生時代>

- ・さいたま市中里前原遺跡出土土器（県教育委員会蔵）
- ・さいたま市下野田稲荷原遺跡出土土器（同上）
- ・深谷市白草遺跡出土匙（同上）
- ・嵐山町大野田西遺跡出土土器（同上）
- ・滑川町屋田遺跡出土土器（同上）
- ・東松山市玉太岡遺跡出土土器（同上）
- ・グラフィック
県内の土器の地域差（東西の違い）を示すイラスト

<縄文時代>

- ・川口市石神貝塚出土土器（県教育委員会蔵）
- ・鴻巣市中三谷遺跡出土土器（同上）
- ・さいたま市寿能泥炭層遺跡出土土器（同上）

- ・さいたま市上ノ宮遺跡出土土器（県教育委員会蔵）
- ・グラフィック
 - ・植物質の器（写真）
 - 石神貝塚出土籃胎漆器（川口市教育委員会提供）
 - 東村山市下宅部遺跡出土木製匙（東村山ふるさと歴史館提供）
 - 胎内市分谷地A遺跡出土漆塗木製水差（胎内市教育委員会提供）
 - 上ノ宮遺跡炉穴写真（県教育委員会提供）

2 たくわえる

- ・坂戸市中耕遺跡出土土師器大型壺（県教育委員会蔵）
- ・寄居町末野遺跡出土須恵器大甕（同上）
- ・川越市宮廻遺跡出土常滑甕（同上）

II 食の確保

小テーマに「1 採集と狩猟」と「2 大地を耕す」を設定した。Iコーナーとは逆に、旧石器時代から弥生時代に向けて、時代順に食の確保のための道具、及びそれぞれの対象となった食物残滓を展示した。グラフィックでは、動植物遺存体など、実物資料から直接イメージしにくいものを補完するため、生態写真や道具の使用方法を表現した写真・イラストを配した。

1 採集と狩猟

<旧石器時代の狩>

- ・鶴ヶ島市新山遺跡出土細石器（県教育委員会蔵）
- ・入間市西武蔵野遺跡出土尖頭器（同上）
- ・所沢市中砂遺跡出土ナイフ形石器（同上）【県指定文化財】
- ・グラフィック
 - 旧石器時代の狩猟対象物（ナウマンゾウ・オオツノシカ）のイラスト
 - 細石器の装着方法解説イラスト

<縄文時代の山の幸>

- ・伊奈町伊奈氏屋敷跡出土弓（県教育委員会蔵）
- ・深谷市原ヶ谷戸遺跡石鏃（同上）
- ・伊奈町原遺跡出土石鏃（同上）
- ・秩父市姥原遺跡出土クリ・クルミ（同上）
- ・吉見町三ノ耕地遺跡出土水さらし用のカゴ（吉見町教育委員会蔵）
- ・吉見町三ノ耕地遺跡出土動物形土製品（同上）
- ・皆野町妙音寺洞穴出土動物骨（キジ・ムササビ・タヌキ）（県教育委員会蔵）
- ・春日部市神明貝塚出土鹿角（春日部市教育委員会蔵）
- ・川口市石神貝塚出土動物骨（シカ）（県教育委員会蔵）
- ・春日部市犬塚遺跡出土動物骨（イノシシ）（春日部市教育委員会蔵）
- ・グラフィック
 - Tピットの写真（狭山市金井上遺跡、鶴ヶ島市新山遺跡）（県教育委員会提供）
 - 狩猟の様子が描かれた土器の写真（青森県葦窪遺跡出土土器）（青森県埋蔵文化財調査センター提供）
 - ニホンジカ生態写真（齋藤貴氏提供）
 - ニホンイノシシの生態写真（町田和彦氏提供）

トチの実の生態写真（個人提供）

水さらし場跡写真（栃木県寺野東遺跡）（栃木県教育委員会提供）

<縄文時代の海の幸>

- ・ 桶川市後谷遺跡出土軽石製浮子（桶川市教育委員会蔵）
- ・ 蓮田市ささら（Ⅱ）遺跡出土土器片錘（県教育委員会蔵）
- ・ 蓮田市雅楽谷遺跡出土石錘（同上）
- ・ 春日部市神明貝塚出土魚骨（マダイ・クロダイ・スズキ・マフグ類）（春日部市教育委員会蔵）
- ・ 春日部市犬塚遺跡出土魚骨（マダイ・サバ・クロダイ）（同上）
- ・ 杉戸町木津内貝塚出土貝類（県教育委員会蔵）
- ・ 蓮田市雅楽谷遺跡出土製塩土器（同上）
- ・ グラフィック
杉戸町木津内貝塚調査状況写真（県教育委員会提供）
土器片錘の使用状況推定図
スズキ写真（さいたま水族館提供）
クロダイ写真（神奈川県立生命の星・地球博物館提供 瀬能宏撮影）
土器を用いた塩作りの実験状況の写真（上高津貝塚ふるさと歴史の広場提供）

2 大地を耕す

- ・ 熊谷市池上遺跡出土炭化米、土偶形容器（さきたま史跡の博物館蔵）
- ・ 深谷市上敷免遺跡出土遠賀川式土器（県教育委員会蔵）
- ・ 熊谷市池上西遺跡出土磨製穂摘具（同上）
- ・ 行田市小敷田遺跡出土磨製穂摘具、打製穂摘具（同上）
- ・ 熊谷市北島遺跡出土打製石鍬（同上）
- ・ 行田市小敷田遺跡出土竪杵未製品（同上）
- ・ 行田市小敷田遺跡出土田下駄杵（大足）（同上）
- ・ 坂戸市中耕遺跡出土鋤（同上）
- ・ 行田市小敷田遺跡出土横広鍬・又鍬（同上）
- ・ グラフィック
北島遺跡弥生時代中期水田跡（県教育委員会提供）
深谷市清水上遺跡古墳時代畑跡（同上）
木製農具解説イラスト

Ⅲ 加工と調理

「食材の加工」という切り口から、考古資料を選択して展示を構成した。小テーマに「1 切る・播る」、「2 火を起こす」、「3 煮炊き」を設定した。

1では、「調理の基本」として、食材を切ることと播ることに用いられた道具について、縄文時代と中世を対比して展示した。先史時代の道具の場合、被加工物は、食材に限定されたものではないが、食というテーマから見た場合、道具類はどのような風貌を示すのかという点に重点をおいた。グラフィックでは、被加工物としてのカットマークが見られる動物骨と、体験学習用の石皿・磨石を用いた堅果類の加工状況の写真を提示した。

2は、火が近世以前においては、照明や暖のためなど、調理のみに限定されないことから構成が困難であったが、火処に関連する考古資料を時代を問わず広く展示し、一部民俗資料によって補足

した。

3では、各時代の代表的な火処を、模型を作成して展示した。これは加熱調理のあり方を具体的にイメージしてもらうためのものである。旧石器時代の加熱調理は、礫群による加熱調理のあり方を推測したものを表現した。また、縄文時代の石囲炉、古墳時代のかまど、中世の囲炉裏は、作成した模型にそれぞれの時代の実物資料を設置し、グラフィックによる補足を行った。

1 切る・搗る

<縄文時代の道具>

- ・小鹿野町薬師堂遺跡出土スクレイパー・石匙（県教育委員会蔵）
- ・同石皿・磨石（同上）
- ・伊奈町原遺跡出土石皿（同上）
- ・グラフィック

宮城県田柄貝塚出土解体痕のある哺乳類・鳥類骨写真（東北歴史博物館提供）

<中世の道具>

- ・菖蒲町菖蒲城跡出土石臼・搗鉢（県教育委員会蔵）
- ・毛呂山町堂山下遺跡出土石臼（同上）
- ・寄居町箱石遺跡出土瓦質搗鉢（同上）
- ・本庄市将監塚・古井戸遺跡出土搗鉢（同上）
- ・グラフィック

石臼の使用状況写真（個人提供）

2 火を起こす

- ・行田市小敷田遺跡出土火鑽板（県教育委員会蔵）
- ・深谷市居立遺跡出土三足火鉢（同上）
- ・深谷市居立遺跡出土三足土風呂（同上）
- ・菖蒲町菖蒲城跡出土火打ちがね（同上）
- ・川島町堂地遺跡出土火打石（同上）
- ・川島町堂地遺跡出土自在鉤（同上）
- ・川越市川越城跡出土火消壺・蓋（同上）
- ・桶川市小在家Ⅱ遺跡出土七厘（同上）
- ・（参考資料）火起こしの道具類（民俗資料）（個人蔵）
- ・グラフィック

火打石の利用方法のイメージ写真

3 煮炊き

- ・所沢市中砂遺跡出土礫（県教育委員会蔵）
- ・毛呂山町まま上遺跡出土深鉢（同上）
- ・行田市築道下遺跡出土土師器甕（同上）
- ・本庄市将監塚・古井戸遺跡出土内耳鍋（同上）
- ・グラフィック

旧石器時代の蒸し焼き料理（イラスト）

縄文時代の石囲炉の使用風景（イラスト）

古墳時代のかまどの使用風景（イラスト）

中世の囲炉裏の使用風景（イラスト）

Ⅳ 食卓の華やぎ

食材の確保から加工・調理を経てできあがった料理、及び食卓を飾る華やかな器を展示することで、考古資料の持つ多様な側面を表現しようとしたコーナーである。小テーマは「1 できばえはいかが」である。調理の結果できあがった料理そのものが遺跡から出土することはほとんどないため、復原事例を、レプリカとグラフィックで表現した。また、食卓を彩ったであろう華やかな器もその一部が残っているに過ぎない。そのため、このコーナーは展示構成が困難であったが、県内出土品の中から優品として知られているものを展示した。

1 できばえはいかが

- ・古墳時代の料理（古墳時代の豪族の食事を推測したもののレプリカ）
- ・伊奈町谷畑遺跡出土深鉢（縄文時代前期）（県教育委員会蔵）
- ・寄居町北塚屋遺跡出土深鉢（縄文時代中期）（同上）
- ・鴻巣市赤城遺跡出土注口土器（縄文時代晩期）（同上）【県指定文化財】
- ・熊谷市北島遺跡出土緑釉陶器皿・手付瓶・碗（古代）（同上）
- ・上里町大光寺裏遺跡出土青磁碗・天目茶碗・瓶子（中世）（同上）【県指定文化財】
- ・菖蒲町菖蒲城跡出土五彩碗・青磁碗（戦国時代）（同上）
- ・グラフィック

縄文時代の食卓写真（福島県文化財センター白河館提供）

Ⅴ ハンズオンコーナー

展示室の一角にハンズオンコーナーを設けた。企画の段階では、「食」に関連するハンズオン展示について様々なアイデアが出されたが、資料の安全性の確保等から実現に至らなかった。「食」とは直接的には結びつくものではないが、見学の箸休め的な場所としての機能や、トークの切っ掛けとなるよう、(1) 縄文土器（レプリカ）の接合、(2) 土器文様の施文の、2種類の体験コーナーを用意した。

3 展示を終えての評価と問題点など

- ・「食の技」を考古資料を用いて表現するという点については、概ね実現できたものと考えている。
- ・写真やイラストなどのグラフィック資料は、実物資料を補完し、総合的に情報を発信する上で、効果的に働いたと考えている。
- ・「食の技」というものが多岐にわたるため、切り口がやや漠然としたものとなった感がある。
- ・「わざ」という観点から展示を構成したため、時代性にはあまりこだわらなかった。その点で、一般の見学者には、時代についてのイメージが収斂しなかったのではないかと考えられる。
- ・個別的なことであるが、「華やぎ」のコーナーでは、古墳時代の豪族クラスの食をレプリカで再現したものと、優品を展示した。大型ケースでの群による展示であったため、やや統一感のない、羅列的なものとなってしまった感がある。優品展示は、期間を区切って、展示替を行う形式とすべきではなかったかと考えている。また、レプリカのできばえは満足できるものであったが、展示方法については、より効果的な展示手法があったのではないかと考えている。

（村田）

テーマ展示
シリーズ 杖刀人のくにの考古学

埼玉県立さきたま史跡の博物館

『まほろば さきたま 考古学が解く食と技』



杖刀人の食譜復原

開催趣旨

人類の歴史にとって最も大切な「食」をテーマとし、「食物の豊かな国(まほろば)さきたまの食とその技」2万年の歴史を考古学で明らかにしようとするものです。

1 器の移り変わり

食器の歴史を現代から縄文時代まで順を追って溯ってみましょう。近世では川越城跡出土の武士が使用した有田焼の茶碗、中世では茶道が食器にあたえた強い影響、古代では上里町中郷遺跡から出土した多量の灰釉皿(灰を上薬に使った陶器の皿)、古墳時代では行田市築道下遺跡から出土した須恵器が注目点です。弥生時代には埼玉県の東部と西部で形や文様の異なる土器が用いられていて、二つの文化圏があったことを知ることができます。

縄文時代では後期の酒器(注口土器)や貯蔵器(壺)のある組み合わせと、前期の深鉢以外ほとんどない様子を比較してみてください。「貯える」のコーナーには各時代の巨大な容器(壺・甕)が3点飾られており、テーマ展示のシンボリックな存在です。飢饉に備えて食料を確保しておいたのです。

2 食の確保

採集と狩猟が食物を得る方法であった旧石器～縄文時代、彼らが実際に食べていたものは何だったのでしょうか？ 獣骨からみると猪と鹿が獲物の代表選手だったようです。約六千年前の温暖化で海面が上昇したため、県内にも海岸線が入り込み、貝塚が残されています。いろんな種類の貝を食べていたことがわかります。魚類ではサバやクロダイなどのほかにサメやフグも沢山食べていたようです。おいしいものを食べるためには勇気が必要だったことがわかります。

しかし、縄文人が最も大量に摂取していたのはドングリと通称される木の実類でした。吉見町三ノ耕地遺跡の水さらし場から出土したドングリの入ったザルは大変珍しいものです。

弥生時代には米作りが始まりました。展示している熊谷市池上遺跡出土の炭化米は約2千年前のものので関東でも最古の米です。また、同遺跡出土の土偶形容器は弥生人の風貌が窺われる貴重な資料です。なかなかの美男子？でしょう。



3 加工と調理

縄文時代と中世の「揃る」道具をくらべてみましょう。石皿と石臼はともに粉をひくための調理具です。木の実や麦・ソバなどを食材とする粉食の証拠品といえます。

調理には火が不可欠です。火起こしの道具と調理場の火をたく場所の進化をたどります。とくにカマドの登場は暖房と調理の火が分かれて台所ができた点で居住生活を変化させました。ガスと電気以前の火をめぐる日本人の工夫をご覧ください。

最後の「食卓の華やき」では西暦480年の杖刀人の食譜復原を行っています。意外にリッチ。皆さんの想像を超えたメニューかも知れません。また、各時代選りすぐりの華やかで芸術性の高い器もご観覧ください。



縄文時代の土器



巨大な貯蔵器



縄文時代の石田い炉



古墳時代のカマド



【学力】「規律ある態度」「体力」の基礎基本

教育に関する3つの達成目標

— 子どもたちに確実に身に付けさせたい! —

【学力】達成目標・・・読む・書く・計算

【規律ある態度】達成目標・・・基本的な生活習慣、学習習慣

【体力】達成目標・・・新体カテドを活用した体づくり

埼玉県教育委員会

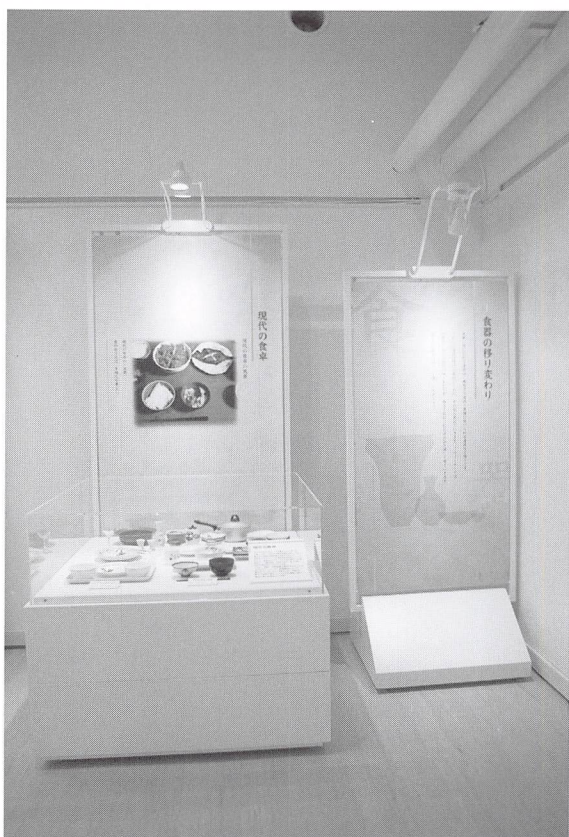
展示解説 (実物は両面カラー印刷、左：表、右：裏)



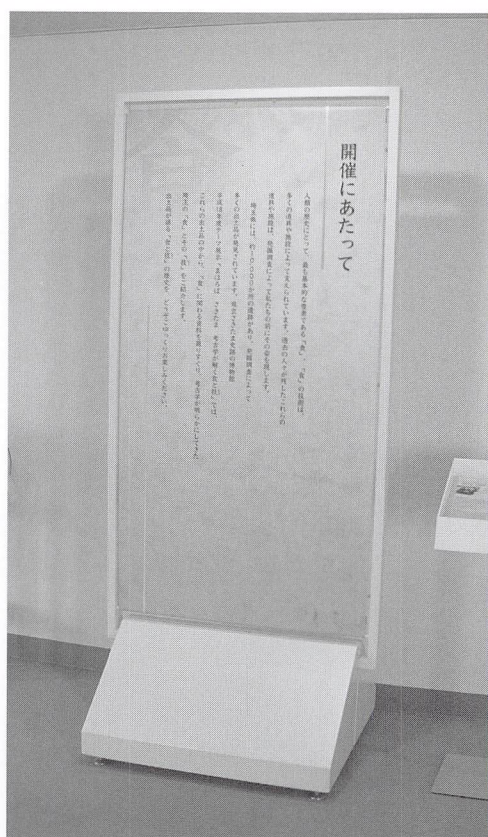
改修後のロビー (世界遺産パネル展示)



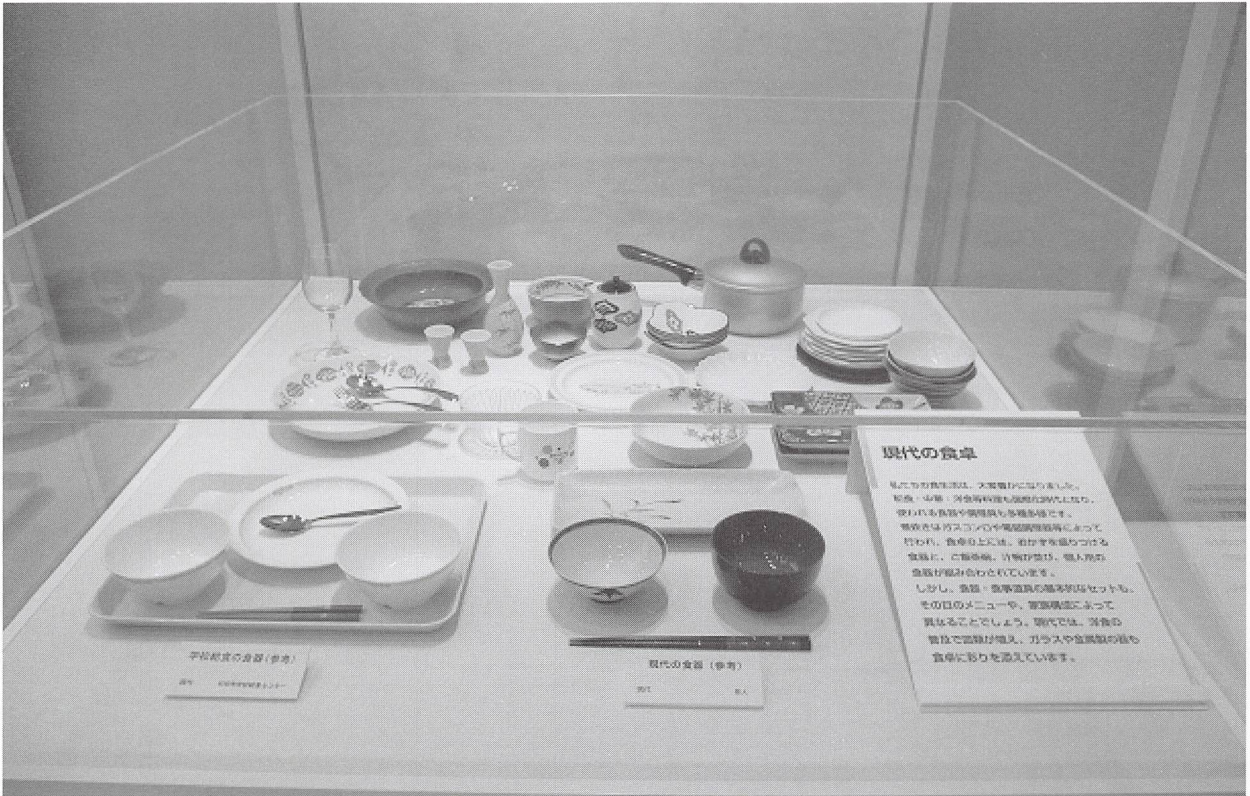
改修後の企画展示室



コーナーパネルとモジュール型の可動ケース



企画展示室入り口前のサイン



食器の移り変わり（導入展示：現代の食卓）



食器の移り変わり（古墳時代・古代）



食の確保 1 採集と狩猟（動植物遺存体展示、生態写真・イラスト）



食の確保 2 大地を耕す



火処の展示（実物資料・模型・イラストの併用）



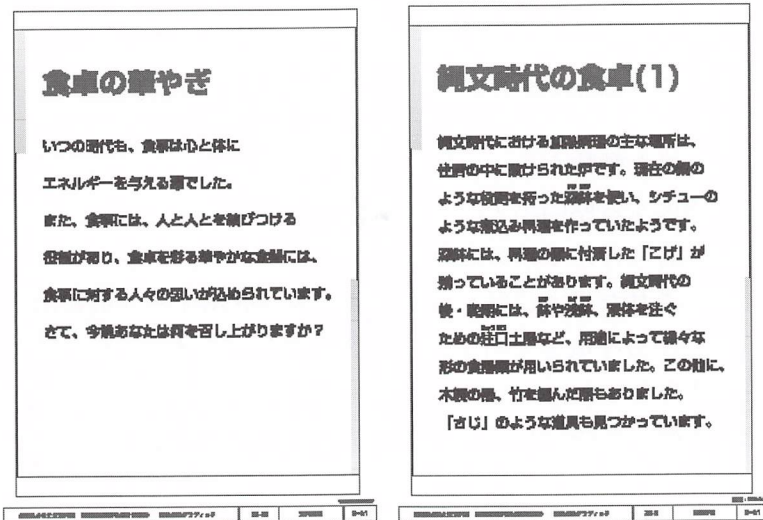
加工と調理 2 火を起こす



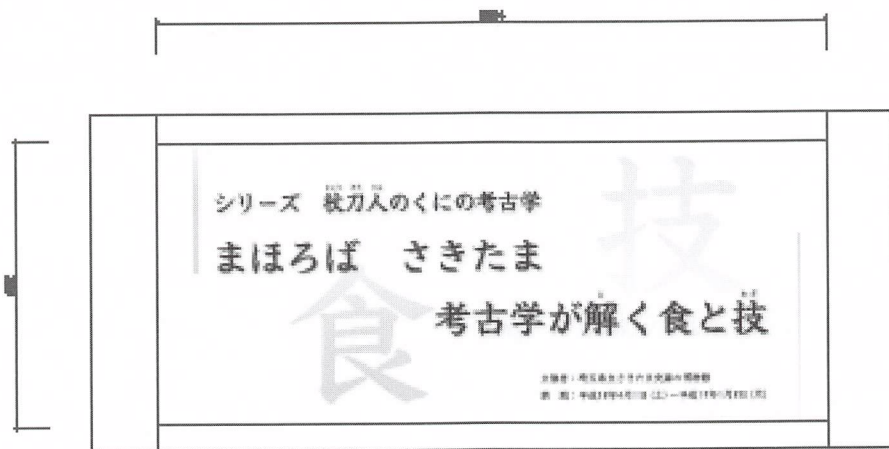
IV 食卓の華やぎ



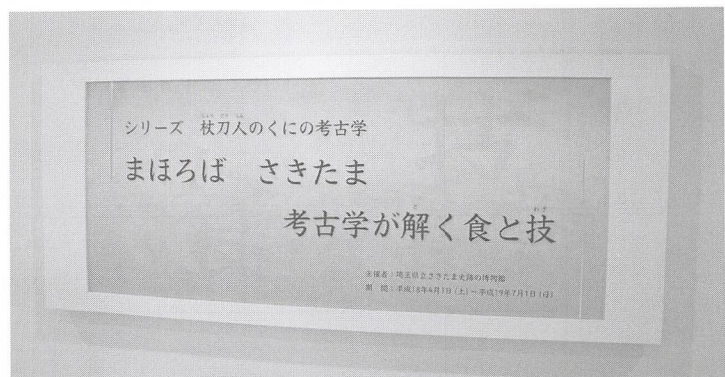
ハンズオンコーナーの設置状況



ケース内の説明パネル（斜台にマグネットによる固定）



表資料館 展示展示室等改修計画業務 展示什替グラフィック	テーマ展示タイトルバ
------------------------------	------------



展示室入り口のタイトルサインの設計と実物

Ⅲ 平成19年度テーマ展「考古学で学ぶ動物とのかかわり」

1 開催趣旨と開催期間について

「身近さ」や「わかりやすさ」をキーワードとするテーマ展の二年度目、平成19年度は、愛玩用にあるいは食料源として、またあるときは畏敬の対象や仇なすものとして、われわれが様々な関係を持ちながら暮らしてきた動物をテーマにした。

展示では動物たちと関係する県内出土の考古資料を中心に紹介し、人々が動物たちとどのようにかかわってきたかを具体的に考えてみることにした。

会期は、前年度に発見された出土資料を夏休み期間中に展示する「最新出土品展」終了後の平成19年9月11日（火）から平成20年7月13日（日）とした。（12月29日～1月3日、及び祝日を除く月曜日は休館とした。）

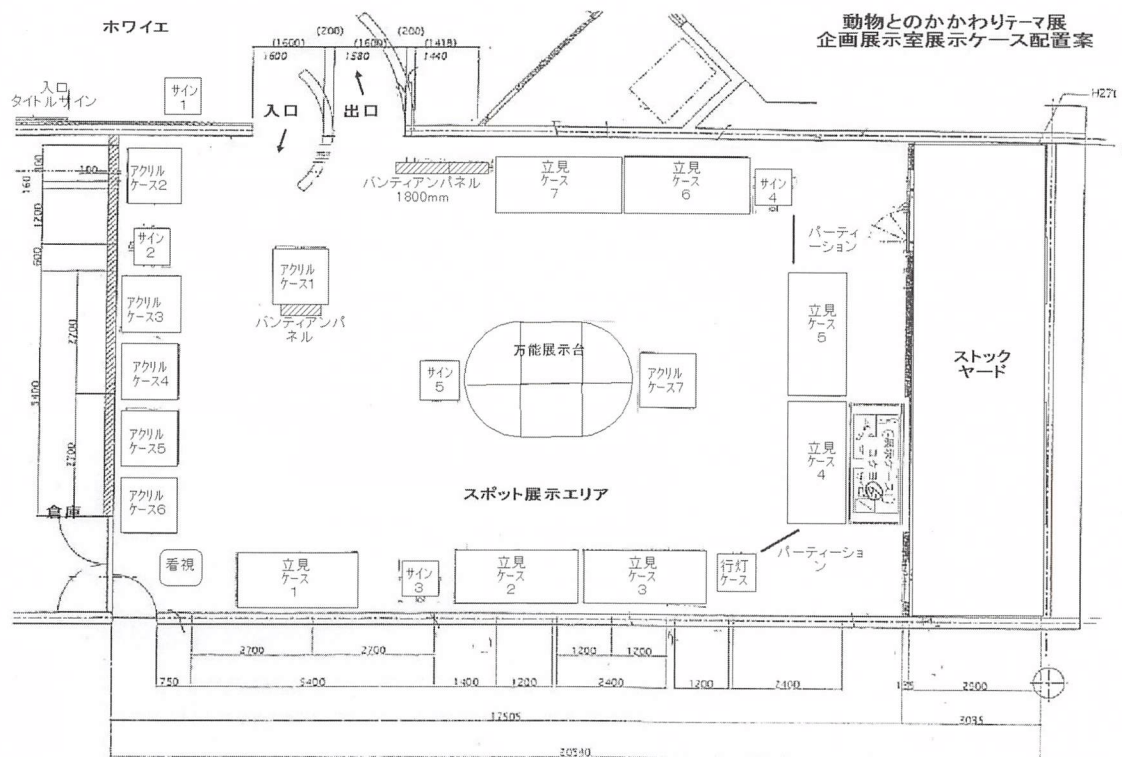
この期間中、本館に入館した約62,000名の方にご覧いただいた。

2 展示構成とレイアウト、展示資料について

まず、「展示の流れに乗って」もらう導入部分に「プロローグ」の展示を設定した。身近な部分での「動物とのかかわり」を例示し、閲覧者各自の場合を考えてもらうのと同時に展示のメイン部分への期待をそそり、誘う工夫のコーナーである。展示室入り口正面に設置。

メインの展示は「Ⅰ 旧石器時代」を始まりとして「Ⅱ 縄文時代・弥生時代」から「Ⅲ 古墳時代」をへて「Ⅳ 歴史・中近世」まで、時代を追った単純明快で話題を取れる構成、内容を心がけた。展示の中心は文化財収蔵施設（旧埋蔵文化財センター）で収蔵する県教育委員会資料を用い、話題性のある資料を県下の市町村教育委員会・博物館から借用して展示することとした。

締めくくりは「エピローグ」のコーナーとし、現代の自然環境の悪化で絶滅が危惧される県内の



前半期の配置プラン（ほぼ固まった段階）

動物について、県の発行した「レッドデータブック」から紹介した。以上は展示室入り口右手から時計回りに壁面に沿って展示をレイアウトした。

展示室の中央の空間は「スポット展示」のコーナーとし、考古資料でない動物関係資料も展示した。以下に各コーナーとその展示資料について詳述する。

プロローグ

平成18年の干支にちなんだ切手やストラップなど、われわれの身近な動物関連の小物資料を展示して導入とした。天候不順の影響と思われる、猪が畑を荒らした内容のインターネットを賑わせていたタイムリーなニュース記事などを、アクリル万能ケース1台で展示した。(このケースは意外にエアタイト機能が保てることが判明。)平成19年1月初頭に干支替わりに合わせ「猪」から「子」に小物を模様替えした。

I 動物とのかかわり＝旧石器時代

県内で動物との直接の痕跡は残されていないが、ローム層中から発見される、狩猟や動物の調理が行われたこと示す石器、焼礫は発見されている。これらをアクリル万能ケースで展示。

- ・鶴ヶ島市新山遺跡出土細石刃(県教育委員会蔵)
- ・入間市西武蔵野遺跡出土尖頭器(同上)
- ・所沢市中砂遺跡出土ナイフ形石器・焼礫(同上)

II 動物とのかかわり＝縄文・弥生時代

縄文時代の代表的な遺跡である貝塚や、洞穴遺跡での動物痕跡や動物を模した土製品などを展示して、生活環境と動物性食料源の関係や交易、精神生活などの面での動物とのかかわりを考える。神明貝塚と妙音寺洞穴の資料はアクリル万能ケースで、その他は立ち見ケースで展示を行った。

- ・春日部市神明貝塚出土鹿枝角・フグ骨等、動物遺存体(春日部市教育委員会蔵)
- ・ " 鹿角製垂飾・簪・貝輪(同上)
- ・ " 堀之内式土器・加曾利B式土器(同上)
- ・ " 尖頭器・軽石浮子・土器片錘(同上)
- ・ " 貝類(同上)
- ・皆野町妙音寺洞穴出土鹿・猪等動物遺存体(県教育委員会蔵)
- ・ " 貝類(同上)
- ・ " 貝製装飾品類(同上)
- ・ " 石匙・石鏃・削器等石器類(同上)
- ・ " 田戸下層式土器(同上)
- ・蓮田市堂山公園遺跡出土諸磯式動物装飾土器(同上)
- ・寄居町北塚屋遺跡出土勝坂式動物装飾土器(同上)
- ・蓮田市久台遺跡出土動物形土製品(同上)
- ・吉見町三ノ耕地遺跡出土動物形土製品(吉見町教育委員会蔵)
- ・志木市西原大塚遺跡出土動物形土製品(志木市教育委員会蔵)
- ・さいたま市札の辻遺跡出土動物形土製品(県教育委員会蔵)

III 動物とのかかわり＝古墳時代

古墳時代の動物造形の代表は動物埴輪で子供たちに人気の考古アイテムでもある。県内の古墳発見の代表的な動物埴輪を展示して、その役割やこの時代の人々の精神性を考える構成とした。

また、近年、貝類などの廃棄痕跡＝「古墳時代の貝塚」や馬の存在や祭祀の可能性を具体的に示す資料が低湿地の遺跡から発見されており、これらを中心に展示した。展示はすべて立ち見ケースを使用。

3 サイン、印刷物について

サイン類は展示室入り口のサイン、屋外設置のタペストリーサイン（1台）、展示コーナーのタペストリーサイン（4台）は委託して作成、各ケースの解説パネル、写真パネルは自前で出力した。印刷物はリーフレット（A4版再生コート紙・20000枚）を委託にて作成、ポスター（B2スーパーファイン紙・50枚）は大型インクジェットプリンターで、展示解説（A4版上質紙・10000枚）も簡易印刷機でそれぞれ自前で印刷した。

4 関連事業について

展示の理解を深めていただくため、展示資料の発掘担当者や話題となる資料の一線の研究者による講演会を6回実施した。会場は博物館講堂で時間はいずれも土曜日の午後13:30~15:30。各講演会とも1か月前から電話で申込み受付とした。

- 講演会1 演題「古墳時代の動物遺存体と交易」
 日時 平成19年9月22日（土）
 講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 赤熊浩一 氏
- 講演会2 演題「埼玉古墳群と馬」
 日時 平成19年10月20日（土）
 講師 鴻巣中学校 山川守男 氏

さきたま史跡の博物館
 平成19年度テーマ展示 シリーズ 杖刀六のくこの考古学
考古学で学ぶ動物とのかかわり

開催期間 平成19年9月11日（土）
 ~平成20年7月13日（日）（予定）

会場 埼玉県立さきたま史跡の博物館
 〒361-0025 埼玉県熊谷市野呂48-34
 TEL.048-559-1181 FAX.048-559-1112
<http://www.sakitama-muse.spec.ed.jp/>

観覧料等 一般200円（120円）・学生100円（60円）
 中学生以下と65歳以上は無料
 ※（ ）内は20名以上の団体料金

休館日 毎週月曜日（祝日の場合は開館となります）
 12月29日~1月3日

さきたま史跡の博物館
 平成19年度テーマ展示 シリーズ 杖刀六のくこの考古学
考古学で学ぶ動物とのかかわり

関連事業

講演会1 演題「古墳時代の動物遺存体と交易」
 日時/平成19年9月22日 13:30~15:30
 講師/埼玉県埋蔵文化財調査事業団 赤熊浩一 氏

講演会2 演題「埼玉古墳群と馬」
 日時/平成19年10月20日 13:30~15:30
 講師/鴻巣市立鴻巣中学校 山川守男 氏

講演会3 演題「縄文時代の動物を考古学する」
 日時/平成19年11月24日 13:30~15:30
 講師/埼玉県埋蔵文化財調査事業団 新屋雅明 氏

講演会4 演題「古墳壁画の動物」
 日時/平成19年12月22日 13:30~15:30
 講師/埼玉県立嵐山史跡の博物館 若松良一 氏

講演会5 演題「原始・古代の豚と猪」
 日時/平成20年2月9日 13:30~15:30
 講師/国立歴史民俗博物館 西本豊弘 氏

講演会6 演題「馬具から考える古墳時代の馬」
 日時/平成20年2月23日 13:30~15:30
 講師/朝日新聞社文化部 宮代栄一 氏

※各講演会とも1か月前から電話にて参加を受付ます。(☎048-559-1181)
 (定員50名・申込順)

主な展示品
 春日部市神原貝塚出土骨角器、熊野町妙音寺洞窟出土骨角器、
 蓮田市久谷遺跡出土動物形土製品、志木市高塚大塚遺跡出土動物形土製品、
 熊谷市北郷遺跡出土馬形埴輪、旧川本町木田出土馬形埴輪、
 熊谷市藤加木遺跡出土馬埴輪、鴻巣市新屋敷遺跡出土馬埴輪の埴輪。

Access

電車・バス
 ●京東線 枚上駅下車
 朝日バス(左衛門由行田車庫)または(左衛門由行田工業団地)行き「産業道路」下車。
 徒歩約15分(1時間3~4便)

●京東線 行田駅下車
 市内循環バス(西循環コース在迎)「行田駅前」から(埼玉古墳公園)下車。
 徒歩約15分(1時間所用約20分)
 ▶8:02発 ▶10:21発 ▶13:31発

●私鉄道 行田駅下車
 朝日バス(新町一丁目(埼玉りそな銀行前))から(左衛門由枚上駅)行き「産業道路」下車。
 徒歩約15分(1時間3~4便)

自動車
 ●東北自動車道 羽生インターから約15km・加須インターから約18km
 ●関越自動車道 東松山インターから約18km・花園インターから約25km

リーフレット（左：表、右：裏 実物は表はカラー、裏は白黒）

- 講演会3 演題「縄文時代の動物を考古学する」
 日時 平成19年11月24日（土）
 講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 新屋雅明 氏
- 講演会4 演題「古墳壁画の動物」
 日時 平成19年12月22日（土）
 講師 嵐山史跡の博物館 若松良一 氏
- 講演会5 演題「原始・古代の豚と猪」
 日時 平成20年2月9日（土）
 講師 国立歴史民俗博物館 西本豊弘 氏
- 講演会6 演題「馬具から考える古墳時代の馬」
 日時 平成20年2月23日（土）
 講師 朝日新聞社文化部 宮代栄一 氏

各講座の概要については、『埼玉県立史跡の博物館紀要 第2号』（平成20年2月）に掲載してあるので、そちらを参照されたい。

5 展示を終えての評価と問題点など

「テーマ展示」は理解しやすさ、身近さがコンセプトなので、シンプルでとりつき易い展示構成を組み立ててみた。

例えば展示資料を時代順に配置したことであり、あたりまえかもしれないが、解説パネルや写真パネル類自体はもちろん、文字も大きく読みやすく、難解読みの資料にはルビを振り、解説を挟むなどの工夫をした。来館者の多くが小学生である点を考えて、プロローグやスポット展示のコーナーでは子供受けする内容、あるいは動物骨の展示などは怖いもの見たさをねらってみたもので、子供たちの展示室内での動きを見ていると、かなり効果があったものと考えている。

予算規模により、ポスターや図録をきちんとした印刷物の形で作成するところまで至らなかったが、解説パンフレットの作成など必要最低限度はどうか実施できたのではないかと考えている。梱包・輸送についても美術品運搬専用車を使用したのは自前で対応できない大形資料のみで、大方は公用車を使用した。人手の不足部分は他の担当グループの支援を受けて実現できた。

(杉崎)

IV 終わりに

現在の博物館の多くは集客数が求められている。現在の博物館を取り巻く経済的あるいは人的な状況下で、博物館としての本来機能である展示だけで、これを達成するのは困難である。たとえば各地域のコミュニティーの核として機能する企画をいかにくり出していけるかが、その一つ鍵となろう。その企画の一翼として「資料の活用」による「展示の変化（更新）」は、これからの博物館としては不断の努力で実施が求められている。

これからのさきたま史跡の博物館のテーマ展示も、こうした路線のもと、魅力的な内容で継続できるよう、関係各位のご指導とご鞭撻をお願いしたい。

また、これまで2回のテーマ展示をほぼ期待どおりに展開することできたのは、各市町村のご担当に通常の企画展示より長期の資料の展示をご理解いただき、ご協力いただいた点大きい。末筆になってしまいましたが、厚くお礼申し上げる次第です。

(杉崎)

考古学で学ぶ動物とのかかわり

開催期間 平成19年9月8日(土)～平成20年7月13日(日)

はじめに

人類は誕生から現在に至るまで、周囲の動物と様々な関係を持ちながら生きてきました。たとえば、最近では愛玩用にふれあう機会も多く、また、食料源として、あるいは畏敬の対象として、かかわりをもってきました。

遺跡の発掘調査がおこなわれると、動物とのかかわりを示す遺物や動物そのものの骨や角などが発見されることがしばしばあります。貝塚の調査では、貝類や大きい獣骨は肉眼でも確認できますが、その土をふるいにかけるとして詳細に調べてみると、様々な魚の骨や貝を加工した装身具の微細な破片など、当時の人々の動物との多様なかかわりを示す資料が発見され、私たちを驚かせてくれます。

今回のテーマ展示では、動物たちと関係する県内出土の考古資料を中心に紹介し、人々が動物たちとどのようにかかわってきたかを、具体的に考えてみることにします。

プロローグ・私たちと身近な動物たち

「動物」をキーワードにまわりを見回してみましよう。たとえば、2007年の干支は「猪」です。年賀はがきには猪があしらわれており、猪の切手やグッズも出回っています。埼玉県のマスコット「コバトン」は天然記念物の「シラコバト」をもとにして創作されたものです。

食事のメニューにも多くの食材がのぼり、ニュースで猪や猿が市街地に出没したり、カモシカの被害などがとりあげられるなど、私たちは動物との密接な関係をもって生活しています。

さて、過去においてはどうだったのでしょうか？

I 動物とのかかわり＝旧石器時代（ローム層に残る狩猟の痕跡）

埼玉県域に人々が生活を始めたのは約3万年前ころといわれています。時に火山灰が降り注ぎ、今よりも寒冷な気候環境の中で、動物の狩猟が行われましたが、動物につながる直接的な痕跡は発見されていません。しかし、火山灰土であるローム層中からは、狩猟用の石器や動物の調理に使われたと考えられる焼けた骨が発見されています。

- 1 -

ではないでしょうか。

また、最近、熊谷市の荒川の低湿地で発見された「古墳時代の貝塚」とも云われる熊谷市下田町遺跡の出土遺物や、古墳時代の代表的資料である古鏡の裏面の文様に表示された動物などを紹介します。

III-1 埴輪の動物たち

古墳時代後期（6世紀ころ）の古墳にはたくさんの形象埴輪がたてられ、動物埴輪も少なからず含まれています。鶏や水鳥、猪、鹿、犬、魚などがありますが、水鳥は死者の魂を天上に運ぶ役割、鶏は時間を告げる役割があったと解釈されています。一番多く発見される馬は、亡き首長の乗り物、猪や鹿は首長が行った狩猟の獲物と考えられ、魚も同様の可能性があります。

志木市西原大塚遺跡では古墳時代の初めころの方形周溝墓から、鳥の形をした土製品が出土しています。鳥形の埴輪より古い時期の遺物ですが、鳥が葬送の祭祀と関連があったことを伺わせる遺物として注目されます。

III-2 「古墳時代の貝塚」

近年、荒川西岸低地の熊谷市下田町遺跡の溝跡から、古墳時代後期（7世紀）の動物骨や海産貝類が発見され注目を集めました。この「古墳時代の貝塚」からは、当時の人々がどんなものを食べていたのかが具体的に分かったことに加え、河川を利用した東京湾方面の海辺の人々との物産交易の実態も分かってきました。

III-3 器物装飾に表示された動物たち

古墳時代に海外からもたらされた文物に中国で製作された鏡があります。古墳に副葬されることの多かったこれらの鏡には、中国で方角の神とされた青龍・朱雀・白虎・玄武を背面の文様にした鏡や、仙人の世界や獅子をデザインした鏡などがあります。

また、鹿と思われる動物などが描かれた紡錘車（糸によりをかける棒につけたはずみ車）には、どのような思いが込められていたのでしょうか。

III-4 遺跡に残る馬の痕跡

乗馬の習慣は古墳時代に朝鮮半島を経て伝わったものです。古墳出土の馬具や馬の埴輪は、馬の使用を物語っています。

また、熊谷市諏訪木遺跡の河川跡からは、馬の陥没した頭骨が出土しており、雨乞いの祭りで犠牲にされた可能性があります。また、付近からは木製の籠も出土しています。

- 3 -

II 動物とのかかわり＝縄文・弥生時代

縄文時代の貝塚や洞穴遺跡では、石灰分などで守られた動物の痕跡が、良好な状態で発見される場合があります。

このコーナーでは、県内の代表的な貝塚と洞穴遺跡に残る動物の痕跡と、人々が土器などに残した動物の絵や模様などを紹介して、この時代の動物とのかかわりを考えます。

II-1 貝塚の動物痕跡

縄文時代には温暖化で東京湾が埼玉県に入り込んでいた時期が2回あります。およそ6000年前の縄文時代前期、そして4000年くらい前の縄文時代後期です。県東部の春日部市神明貝塚は下総台地に残された、県内縄文時代後期の代表的な貝塚で、環状（円形）に貝が分布しています。確認調査で様々な動物骨と狩猟用具、動物骨や角でできた装身具が見つかっています。海に隣接する遺跡らしく、陸上の大型獣ばかりでなく、多種・多様な魚類骨が見つかり、豊かな海の幸に支えられた人々の生活の様子が想像できます。

II-2 洞穴遺跡の動物痕跡

秩父の山中では洞穴遺跡がいくつか発見されています。妙音寺洞穴は縄文時代早期（約8000年前）を中心に形成された洞穴遺跡で、厚く堆積した灰層により、動物の骨角や骨角を加工した装身具などが良好な状態で発見されました。

鹿や猪の骨の出土は、山の中に住んだ人々の食料源の痕跡として当たり前かも知れませんが、意外な遺物として、海産の貝類や装身具も出土しています。これらは遠く海辺に住んだ人々との交流を物語っています。

II-3 土器・土製品の動物

縄文土器の文様や装飾には、まれに動物の意匠（デザイン）が見られます。動物のもつ不思議な能力に驚くことがしばしばありますが、科学的知識がほとんどない当時の人たちの驚きや恐れは現代以上に強かったものと思われる。彼らの能力にあやかり、頼る気持ちが表現されているのかも知れません。

また、動物をかたどった土製品がまれに出土することがありますが、何のために作られたのか、はっきりしていません。

III 動物とのかかわり＝古墳時代

古墳時代の動物関係の資料といえば、多くの人々がすぐに動物形埴輪を思い浮かべるの

- 2 -

IV 動物とのかかわり＝歴史時代・中～近世

歴史時代（8世紀ころ）以降の資料から、祭祀具の動物や城跡発見の動物痕跡、日常什器、調度に表現された動物たちを紹介します。

近世（江戸時代）以降には、動物の意匠（デザイン）の生活用具がたくさん造られたことがわかります。

IV-1 祭祀遺跡の馬形

馬が水の祭祀とかかわりがあることは、古い文献の記述からわかっています。台地縁辺の湧水地点で水の神を祀った、熊谷市西別府祭祀遺跡からは、かなり形骸化してはいますが、滑石製馬形が出土しており、人々の生活や収穫のための水を供給してくれる神を祀ったことがわかります。

IV-2 城跡の動物痕跡

行田市の忍城跡から発見された動物関連資料を紹介します。忍城跡から出土した馬頭骨は、本丸を囲む堀にかけられた橋の基礎杭が貫通していて、「水城」と称した忍城の堀の水が枯れぬよう供えられた可能性があります。また、犬の骨には解体痕があらって、食料とされた可能性があります。

IV-3 什器に現れた動物たち

江戸時代後期以降では、日常什器類に動物が多く登場するようになりました。川越城跡八幡曲輪の土城から出土した土製の人形は、遊具かお守り、あるいは節句の祭具と考えられています。

稲荷社の狐人形、猿形の取組線香入れなどは、現代の道具と通じるものがあります。猿の人形は「猿」が「去る」に、鳥の人形は、「鳥」が「取る（除く）」と語呂があうことから、子供の虫封じなどに効き目があるとされました。

エピローグ・今後の付き合いを考える（パネル展示）

縄文時代から近世まで、人間と動物とのかかわりを示す考古資料を紹介してきました。展示資料はほんの断片にすぎませんが、人間と動物との長いかかわりの歴史を御覧いただけたことと思います。

さて現在、動物を取り巻く自然環境は昔と比べるとかなり悪化していることが埼玉県発行の『レッドデータブック』でわかります。多くの動物たちと共生していくことが人間にとっても大切であることを、認識しておく必要があるようです。

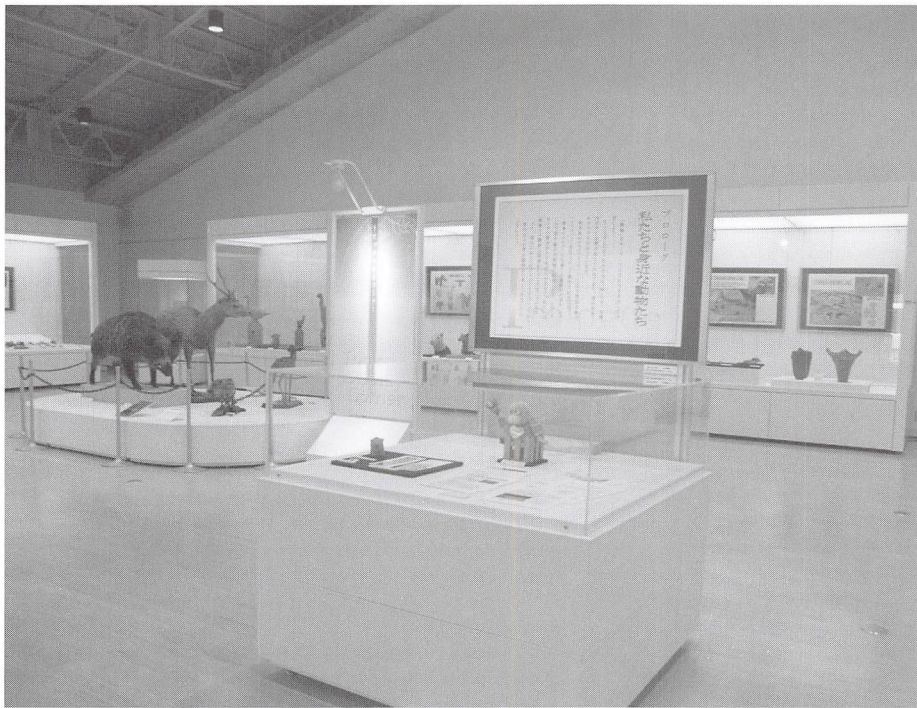
- 4 -



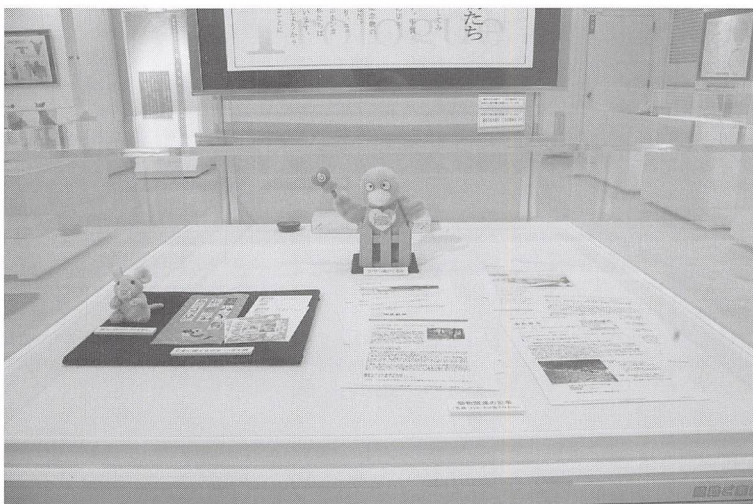
屋外サイン



展示室前のパネルサインとあいさつサイン



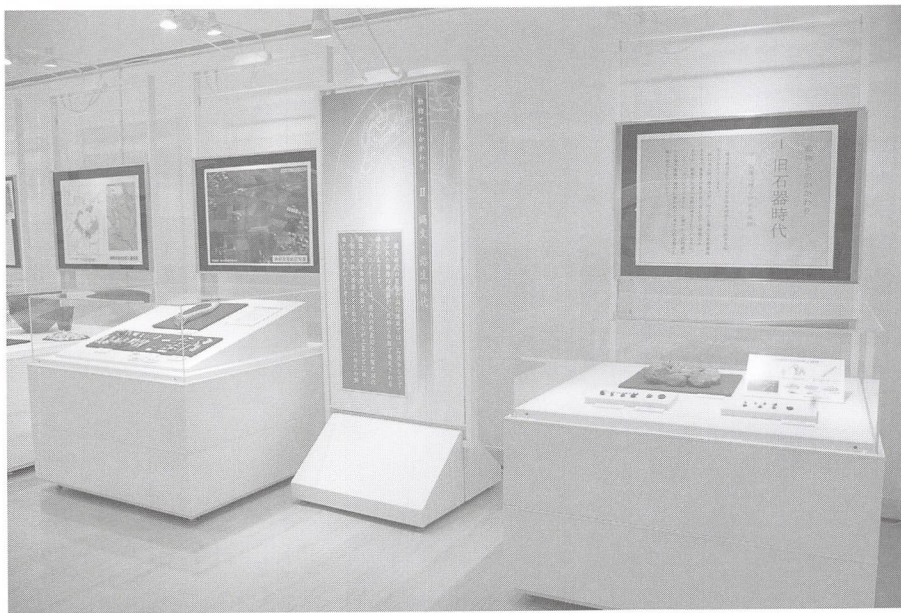
プロローグのケース
(展示室入口から)



同上
(後半期の状況・子年用に入替え済み)



プロローグ (左) と
縄文のコーナー



旧石器時代のコーナー
(右) と縄文時代のコー
ナー (左)



縄文時代 (貝塚) の
コーナー



縄文時代（洞穴）の
コーナー



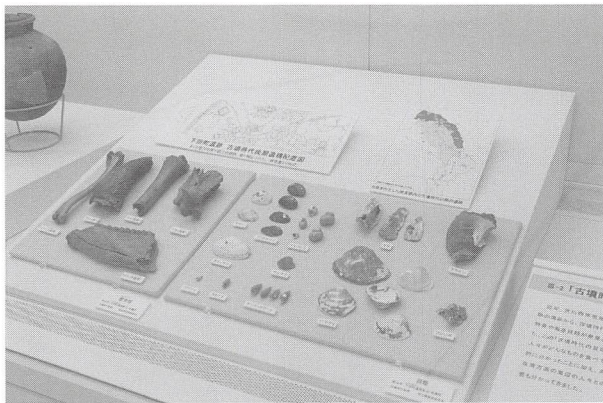
縄文時代（土器装飾）と
弥生時代（土製品）の
コーナー



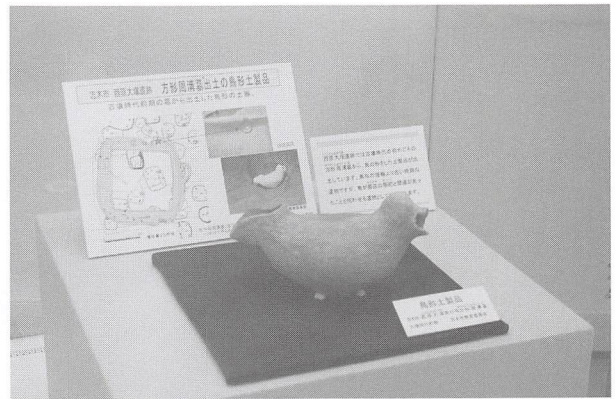
古墳時代（埴輪）の
コーナー



古墳時代のコーナー



下田町遺跡の「古墳時代の貝塚」出土資料



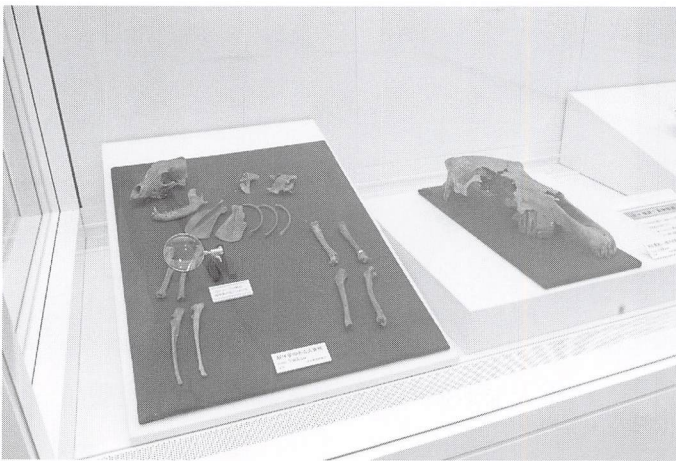
西原大塚遺跡の方形周溝墓出土鳥形土製品



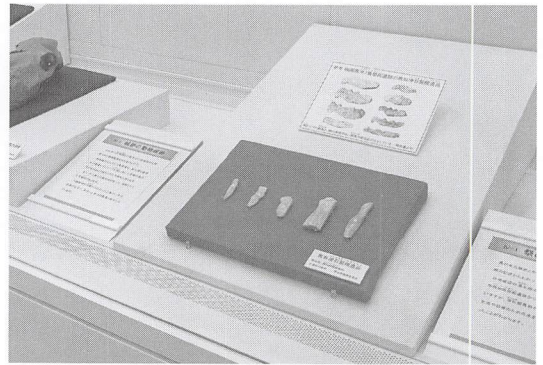
古墳時代のコーナー（鏡と馬の痕跡）



歴史時代・中世
のコーナー



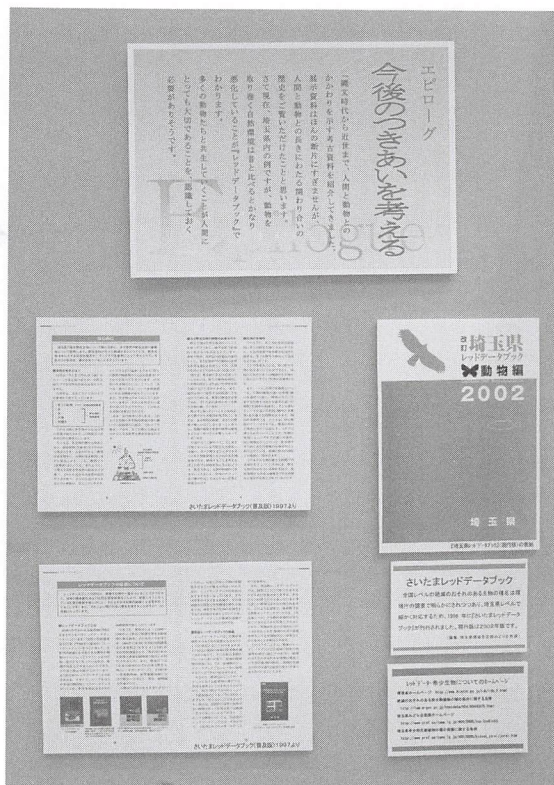
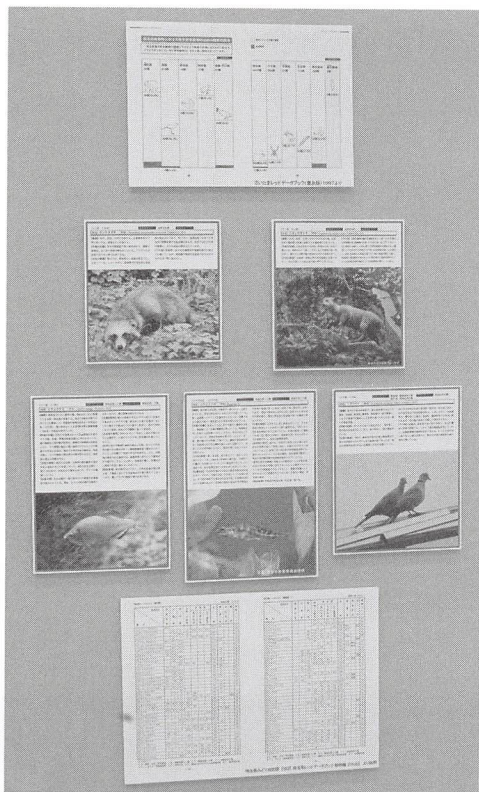
忍城出土の動物骨（馬頭骨と犬骨）



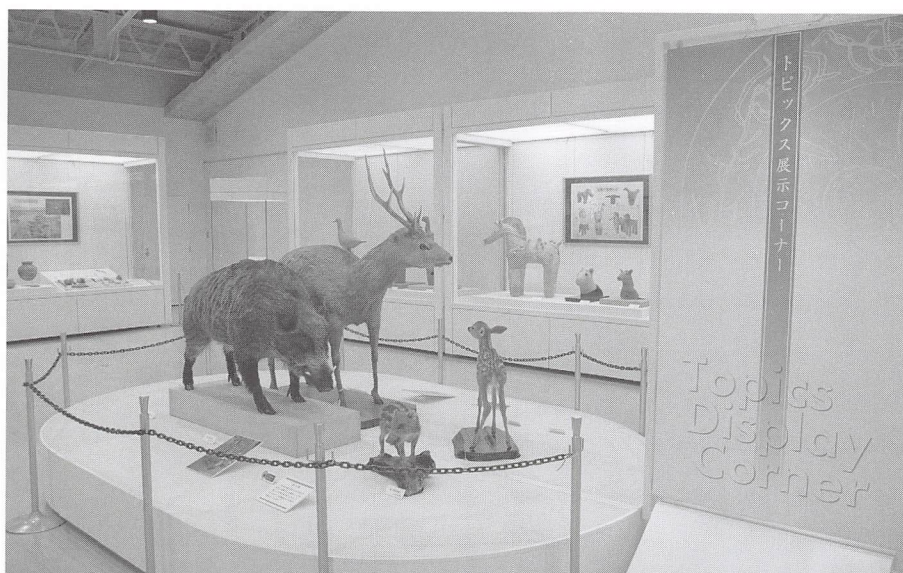
西別府祭祀遺跡の馬型滑石製模造品



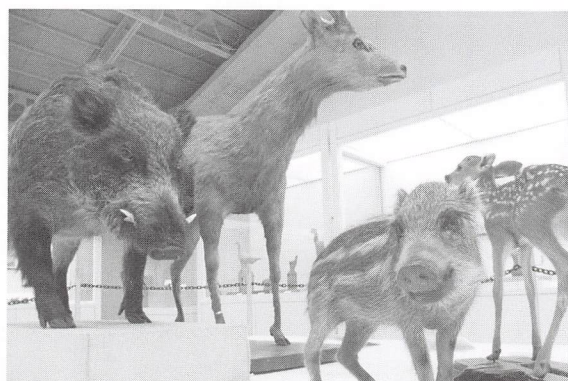
川越城跡出土の動物形
土製品等



プロローグのコーナ（自作パネルによる展示）



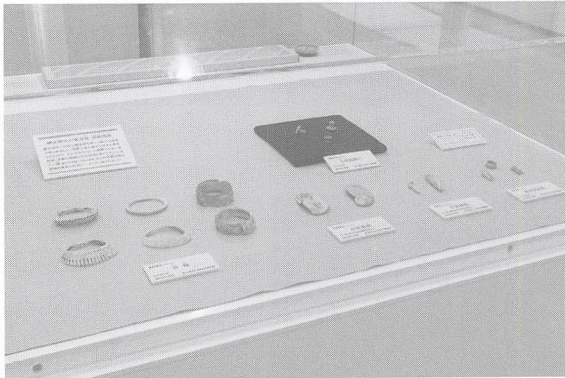
前半期のトピックスコーナー



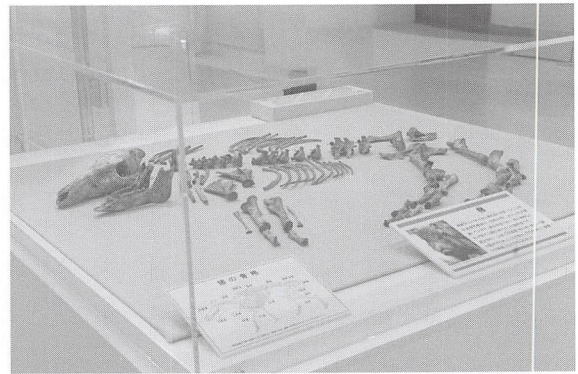
干支の猪と鹿剥製資料



後半期のトピックス
コーナー



縄文時代の装身具のケース



猪骨格標本



講座の様子